

■ 義門の和歌

○七高僧をたゞへ奉りて (吉澤義則氏藏)

龍宮になみ間分入てのりの海の玉貝をあはれ探り出しかも
天原むなしきまゝに月花もうてなもあれどうべ説れけり
曇なきあきの月かな往き還るすがたをやに示す御言は
道はあれごみづからゆきは至り得じ憑め他をと教へけるよな
善き人のたとへを聞ておち居ずばあしき火水の身をいかにせん
源のふかき心から人もはるかに汲てあがめたりけん
法の門ちへに構へてとがむるを答へどひつゝ行も遂しか

○帝 堯

うみの子のめぐみにかへてよの人をいつくしみてし君にも有哉

義 門

—『眞宗先哲筆蹟集』より—

—住田智見氏藏—

○

しづかなるまなびの窓にさしはへてとひ來る友はたゞ夜半の月

○東

うちなびく霞の間より朝日かけさせるや春の立そめし空

○南

咲初しはなのあとゝてそなたよりみつ枝もまつやさしはじむらん

○西

木間よりほの見る月の入るかたやあきの心をつくしぢのそら

○北

雁の來しかたはとみればむらがりてゆきゝの雲の空にしらす

○元 日 に

年なみは春よりさきにみかは水よとまぬ御代をまつやよせける

○二 日

今ふた夜明なはひらのやま高くよかは霞みて春も立らん

〇三 日

明日たつとをとつひ來ぬとけふをきくけふときのは冬かあらぬか

〇四 日

春のけふみか過て後たちぬるはよかれと年をことふきて也

〇五 日

夜まてるおもひをけふは言ひ出ていつかと誰もいふにや有らん

〇六 日

位山もとほろふ日とけふをき九昨日みそらの霞むとしには

〇七 日

ゆめに陀にかものはいろのうまらにとをしまぬ身さへけふは願はる

〇八 日

けふよりそこかねのひかるわさすらん玉のうてなにとをかよか迄

〇九 日

年立し日數よむてをいつゝをりてよつのへたれはわさらひの吳跡

—妙玄寺禪門法師の書翰、井上頼文の國學院雜誌一九四より—